

浦幌町の伝統芸能

後藤秀彦

1. はじめに

筆者は、北海道文化財保護協会が北海道教育委員会の委託を受けて昭和56・57年の2カ年にわたって実施した「北海道民俗文化財調査」の調査員の委嘱を受け、浦幌町および豊頃町の主として大正年間の民俗調査をする機会に恵まれた。調査は道内から150地区を選定し、実施されたが、本州各県からの移住者群によって構成されている北海道の特殊な事情から考えて各町村の中味毎に様相は異なり、十分なものが作成されないという予測のつくものであった。又、北海道の初期を形成する漁業への配慮が少なく、更に北海道を特色づける畜産への配慮が殆ど無かったことは今後に残された課題である。しかし、そうしたマイナス要因があったとしても、今回の全道を網羅した調査は民俗調査としては最初のものであり、また規模としても最大のものであった。

筆者は調査の重点を、本州の民俗文化がどの程度北海道へ持ち込まれ、どのように変容しているかに置き、調査地区を同一地区からの団体移住として、現在もその形を維持している次の2地区を選定した。

浦幌町字稻穂（加賀団体）

豊頃町字二宮

こうした経緯を経て、各町村に残されている伝統芸能の分布を調査することとなったが、ここに今まで知られていなかつたいくつかの伝統芸能が伝承されていた事実を知ったのでここに報告しておきたい。

なお、この伝統芸能の報告は浦幌町内に残っているもの、又は過去に残されていたものに限定している。

2. 概要

浦幌町内において古くから知られている伝統芸能は「開拓獅子舞」である。かつては「越中獅子舞」といわれていたものが原形のようであるが、1964年の保存会設立の際に「開拓獅子舞」と名称を定めたものである。爾来、浦幌の開拓獅子舞として広く流布し、町外にも知られるようになった。この獅子舞の起源については山村照雄（1978）が詳述しているところである。ただ、従来から、石川・富山の両県からの伝承とされていたのは、誤りで、「富山県」の越中獅子舞を起源として、おそらくは、富山県西砺波郡のいずれかの町村の獅子舞であるものと考えられる。この点については追跡調査を更に進めたいと考えている。

以上のように、浦幌町の伝統芸能はこの獅子舞に限られること多かったが次項で、新たに知りえたものについて概述したい。

3. 新たに知りえた伝統芸能

稻穂の獅子舞 1909（明治42）年、石川県津幡町から団体入植した人々によって伝えられた。この団体は一般に「加賀団体」と呼ばれ、入植した沢を「団体沢」と呼んでいる。この人達が、住吉神社の秋祭に奉納するために郷里の獅子舞をまねて始めた。1918（大正7）年ごろのことのよう

----- 目 次 -----

浦幌町の伝統芸能	後藤秀彦	2
十勝太古川遺跡出土の轍の羽口	宮宏明	4
浦幌町郷土博物館報告総目次一創刊号～第19号一	浦幌町郷土博物館	10

表紙写真説明：厚内・斎藤兵一郎家
コニー付の2階建洋館で、当時の最も漸新的な様式を今に伝えている。

明治末期に斎藤兵太郎によって建てられたこの住宅は、バルコニー付の2階建洋館で、当時の最も漸新的な様式を今に伝えている。

である。獅子舞は昭和初期まで続けられた模様であるが、その後行なわれなくなり、現在では舞い方を知っているものは皆無である。往時、獅子舞は、義務教育終了後加入する「士多頃辺青年分団」を主体に行なわれ、各戸を廻って歩いたといわれている。獅子舞の構成は、詳かではないが、天狗が、刀剣・鎖鎌などをもって獅子と相対峙するもので、頭・カヤ・衣装などの一部は浦幌町郷土博物館に所蔵している。

沖揚げ音頭 戦前、日本海沿岸でニシン漁に担わっていた人々が、道東にもちこんだものである。浦幌町内では海岸地帯の厚内・十勝太の漁師の間に伝えられる。かつては、8月中旬～12月上旬にかけて行なわれる鮭漁の際にもわずかに唄われたようである。

唄は、ドットコセ～はおえ～切り声～ソーラン節からなり、船おろしから網起し、帰浜までの一連の作業が唄われ一種の組曲となっているが、現在では「はおえ」が独立し、めでたい唄として漁師の結婚祝賀会などで唄われることもある。

ドットコセ	上声	ドートコー	ドートコー
	下声	ヤードー	ヤ

ードー

はおえ	上声	オーシコイ	ホラーヨー
	下声	オーシコイ	オーシ
	ホラーヨー	コーイ	エーン
	コイ	オーシコイ	ヨーコイ
	ヤーン	エンヤコラー	
	オーラーヨーサーエ		オラ
	ドッコイサー	オラーヤ	
	ンヨーシコイ	オーシコ	
	サー	エエサー	
	オラーヨーサーエー	オーラデーヨー	
	ヤレコーエー		
	ーシコイ	オーラーヨーシコイ	

切り声	上声	ドートセーノータラコリヤ	ヨヤ
	下声		エー
	ーサー	サノコイサー	
	ハーヨーヤーサー		エーヨー
	ヨーアイトナー		
	ヤサー	ホーラーエイイヤ	ハラ
		ヨイドコ	ヨイドコ
	リヤリヤドッコイ	ヨイドコ	ヨイドコ

ナー	ヨーリヤエーカタエタノートリー
----	-----------------

ダーヤーエー	ト
--------	---

ヤートコセートイリヤアーナ	
---------------	--

一	
---	--

ゴーリヤーエンヤアハリヤリヤドッコイ	
--------------------	--

ホーリヤエ一家の	
----------	--

ヨーアイトコヨイトコナー	
--------------	--

亭主のヤーレー	
---------	--

ヤートーコーセーヨーイヤ	
--------------	--

ホリヤーサエタルハオカガコイネーニ	
-------------------	--

ナー	
----	--

金が湧くヨーアイトナー	
-------------	--

ホーラーエンイヤハ	
-----------	--

ラリヤリヤードッコイ	ヨーアイトコヨー
------------	----------

オートコセオータラコリヤ	ヤ
--------------	---

イトコナー	エーン
-------	-----

ーンオイサー	オーラオイザデー
--------	----------

ヤースオイサ	ヤ
--------	---

オーラ	
-----	--

ースオイサー	オーラホイイヤーソーオイ
--------	--------------

オーラオイサデ	ヤーンサノドッ
---------	---------

サ	ヤースオイサ
---	--------

コイ	
----	--

このように、ドットコセ～はおえ～切り声は唄われるが、最後のソーラン節は「変え唄」が多く歌詞も即興的で、その時・場に合わせて詞が作られる。上手な唄い手は、歌詞を場に合わせてアドリブで唄ったものだという。

越前踊り 浦幌町留真地区で盆に踊られる。福井県から入植した人々によって伝えられ、かつては盆以外にも踊られたようである。川畠梅吉の音頭とり、朝日浅吉の踊りというのが今日にまで語り継がれたコンビであった。往時には近郷からもこの越前踊りに参加するために集まったというが、現在では留真地区のみで伝承されている。

時和の神楽 もと時和にあった常盤神社に奉納されていた。往時は舞台を作り盛んであったというが、現在は神社も浦幌神社に合祀され全く行なわれていない。「出雲神楽」の系統を引くも

のらしく、因に常盤神社の祭神は天照皇大神であった。

4. おわりに

前項で概述したように、広く知られている開拓獅子舞のほかに、稻穂の獅子舞、沖揚げ音頭、越前踊り、時和の神楽の4つを摘出した。これらの伝統芸能の多くは、既に伝承者がなく亡んでしまったものもある。しかし、明治期に入植とともに

この地に伝えられてから永々と息づいているものもある。本町にはこのほかにも、本州からもちこまれ、開拓初期のムラを楽しませたものがあるかもしれません。今後も継続して調査を進める所存である。

(浦幌町郷土博物館学芸員)

引　用　文　献

山村照雄 (1978) 「浦幌町開拓獅子舞 (浦幌町無形民俗文化財)」浦幌町郷土博物館報告

11 浦幌

十勝太古川遺跡出土の鞴の羽口

宮　宏　明

本資料は、浦幌町十勝太古川遺跡8号竪穴から出土したものであるが報告書は未刊である。近年の擦文文化に伴う当該遺物の増加による再考気運の昂揚に促され紹介するものであり、擦文文化における「鉄」がどのようなものであったのか、研究の一助になれば幸いである。

鞴の羽口の先端部直径は26mm、基部側直径は37mm、長さは(77)mmで土製である (Fig. 1)。羽口の先端部には、図のように熔解した後、固まった鉄が付着している。文様はなく、胴部へゆくにしたがって脹らみを呈する。羽口内部の観察から

やや楕円形の棒状のものを芯として、それに粘土をはりつけ静かに真すぐ抜きとったものようである。色調は、胴部は灰褐色、先端部近くは熱を受け灰白色に変色している。焼成は硬く、羽口先端部では部分的に黒色のガラス化したものも付着している。

8号竪穴 (Fig. 2) は第2地点の東端に所在し竪穴の大きさは東西5.3m、南北5mの方形プラ

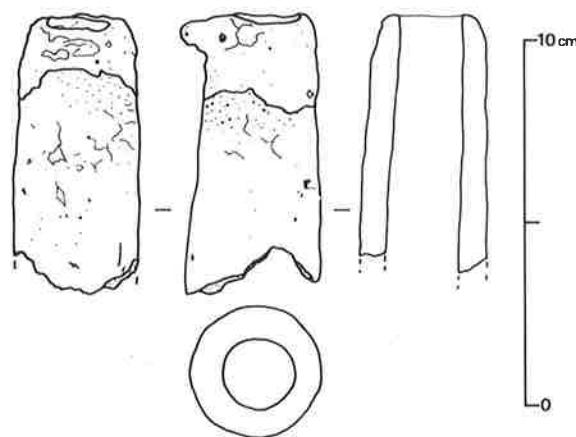
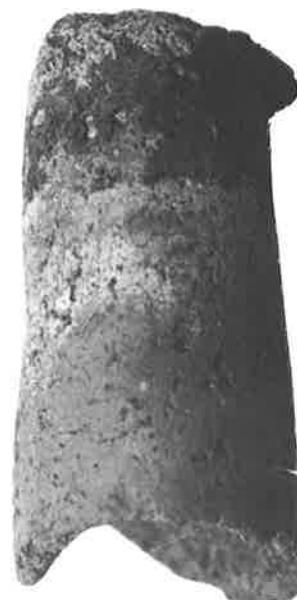


Fig. 1 十勝太古川遺跡出土の鞴の羽口



P.L. 1 十勝太古川遺跡出土の
鞴の羽口